

解夏

さだまさしさんの小説。

友人が研究室においていったのを勝手によみはじめたのですが、
なんだか世界にどっぷりつかからされてしまった。

自分をみつめること、

他人をみつめること、

自分たちを困む様々なものに目を向け思いを馳せること、

過去を紡いで、未来に目を向けること。

なんかそういう気持ちが肌にすりこまされるような。

あとがきで重松清さん原点回帰という言葉を使っていた。

ちなみに、読みながら、思わず涙を流してしまいました。

何のために流れでた涙なのか、は、わからないけれども。